川瀬亨陸軍大尉の旅順攻囲戦参戦記録
――要塞爆破の最前線秘話――

松　井　道　昭・五十畑　弘

目次

1．序
2．対象資料および報告方法
　2.1 対象資料
　2.2 報告方法
3．「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」本文および関連事項
　3.1 表紙および裏表紙
　3.2 「目次」
　3.3「はじめに」
　3.4 日露戦争の主な戦闘
　3.5 第三軍の組織全体図
　3.6 写真・招魂際
　3.7 旅順攻囲戦の手記
4．あとがき

要旨

旅順攻囲戦に参戦した川瀬亨陸軍大尉は、明治 37 年 6 月の出征より同年末の旅順要塞陥落までのおよそ半年にわたり、東鶏冠山北堡塁爆破に至る第一線における体験を子孫への伝承のために書き残した。この記録は子息の川瀬金次郎によって図・写真などが加えられ、昭和 63 年に「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」としてまとめられた。本稿は、川瀬亨、金次郎の子孫によって保管されていたこの資料を歴史資料として将来にわたり継承保存されるべく、関連資料などを加えて執筆したものである。

1．序

川瀬亨陸軍大尉は、明治 37（1904）年 6 月より翌 38 年 9 月の帰還までの 1 年 4 ヶ月にわたり、乃木将軍の率いる第三軍に第 11 師団将校として日露戦争に参戦した。この間、日露戦争中で最も熾烈を極め日露両軍が多大な死傷者を出した旅順攻囲戦を、第 11 師団の参謀業務の立場から間近に体験した。この体験の記録は、川瀬亨が昭和 20 年 4 月に死去する前年の昭和 19 年 11 月 7 日付けで、子孫への伝承のために書き残された。この体験記をもとに、昭和 63 年頃、川瀬亨の子息（次男）の川瀬金次郎がとりまとめたのが、「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」である。

この「手記」がどのような形で公開がされたかについては明らかでないが、少なくとも一般に流布する形での歴史資料とはなっておらず、その意味で書誌コントロール下にない私文書であり、いわゆる灰色文献に属する資料に留まる。

本稿の目的は、子孫への伝承を意図した記録をもとに作成された「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」は、広く歴史資料として扱う価値を有するとの判断のもと、一般の入手・閲覧の可能な書誌管理の範囲に組み込む歴史資料とすることにある。

2．対象資料および報告方法

2.1　対象資料

本稿で対象とする資料は、昭和 19 年 11 月 7 日付けの川瀬亨大尉の手記を川瀬金次郎（新潟大学名誉教授、農学博士）が原文をもとに取りまとめた小冊子である。以下「対象資料」と呼ぶ。この冊子は A5 版、ホチキス止で、表紙・裏表紙（ともに口絵写真付き）、本文 25 ページである。

対象資料は、川瀬金次郎によってカタカナの原文がひら仮名に直され、ルビ加筆がされ内容の一部削除・追加がなされている。さらに川瀬亨が現地から持ち帰った写真のほか、関連資料から図・表などが挿入されている。

対象資料に記された時期は、明治 37 年 6 月の出征から、要塞戦に入っ

た同 8 月以降 3 回の総攻撃を経て所属の第 11 師団が三大堡塁のひとつである東鶏冠山北堡塁を破壊・占領するまでである。

2.2　報告方法

対象資料は、可能な限り原文を掲載し、その内容の関連事項、文献史料、その他注釈などを加えた。ワープロ縦書きによる対象資料を、本稿では横書き表記とし、内容のまとまりごとに分割し、□で囲って示した。この各分割した部分の内容に関連する事項・文献史料・注釈を、その直後に示した。対象資料に掲載されている写真・図・表などは不鮮明なものが多いため、タイトルとキャプションのみを示して省略するか、あるいは同種の写真等を参考として掲載した。

3.「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」本文、および関連事項

3.1 表紙および裏表紙

表紙タイトル　「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」　　川瀬金次郎 表紙写真・「旅順攻略に猛威を発揮した二八糎榴弾砲」 裏表紙写真・「坑道作戦により松樹山堡塁を爆破した（明治 37 年 12 月 30 日）」

表紙には 28 サンチ榴弾砲、裏表紙には松樹山堡塁爆破の写真がそれぞれ掲載され、上記の説明がなされている。川瀬亨大尉所属の第 11 師団は、三大堡塁のうち東鶏冠山北堡塁の爆破に最初に成功している。

これに続き、第 1 師団によって松樹山堡塁が、第 9 師団によって二龍山堡塁が破壊された。裏表紙は、このうち二龍山堡塁の爆破の写真である。ここでは、対象資料掲載の写真が不鮮明なため、28 サンチ榴弾砲の試射の写真および別の松樹山堡塁爆破の写真を示す。

図 1（左）王家甸南西くぼ地にある 28 サンチ榴弾砲の試射[1]

図 2（右）松樹山堡塁爆破　明治 37 年 12 月 30 日正面爆破の光景[2]

3.2 「目次」（対象資料とびら）

◇目　次

表紙写真・旅順攻略に猛威を発揮した二八糎榴弾砲

◇はじめに

付図・日露戦争の主な戦闘

付表・第三軍編成表

写真・招魂祭（明・三八・一・一四）

◇旅順攻囲戦の手記

▲出征途上の途へ▼

写真・出征途上、丹波丸船上にて

▲旅順攻囲戦の経緯・緒戦▼

写真・土屋第十一師団長と幕僚

▲旅順攻囲戦の経緯・第一回総攻撃▼

図表・旅順要塞攻城戦
▲旅順攻囲戦の経緯・第一回総攻撃失敗後、師団参謀部へ▼
写真・土屋第十一師団長と幕僚（大狐山北麗にて）
写真・第十一師団司令部の宿舎（大狐山北麗にて）
▲旅順攻囲戦の経緯・攻撃遅々として進まず▼
写真・日本軍側が掘削した爆破坑道
▲旅順攻囲戦・攻撃地点を二〇三高地へ▼
写真・旅順艦隊を砲撃する二八糎榴弾砲
▲旅順攻囲戦の経緯・第十一師団東鶏冠山北堡塁を攻撃▼
▲旅順攻囲戦の経緯・東鶏冠山北堡塁爆破作業の経過▼
付図・毛筆で書かれた原文の抜粋
写真・北砲台爆破（銃眼より撮影）
写真・一二月十八日攻略の東鶏冠山北堡塁の防備を固める第十一師団
写真・戦死者を埋葬する露軍（ロシア側撮影）
写真・入城式（明・三八・一・一三）
◇あとがき
写真・宇都宮大演習にて、状況説明の川瀬少佐
裏表紙写真・松樹山堡塁を爆破（明・三七・一二・三〇）

目次は、川瀬亨大尉が書き残した体験記の手記をもとに、対象資料の著者川瀬金次郎が加筆・修正・削除あるいは、図・表の追加等の編集をしてまとめた際に、新たに構成したものである。

3.3 「はじめに」（対象資料 pp.1-2）

川瀬亨陸軍大尉の旅順攻囲戦手記　川瀬金次郎
◇はじめに
私は大連市金州区陳美良区長の招待で「東方技術協力会 88 農業技術交

流代表団として去る一〇月二三日より二八日の間大連市金州区を訪問し、主としてリンゴ栽培の現状視察に参加し、専門の放射能汚染についても講義を行った。

同行の阿津坂君は大連生まれの金州育ちで、彼の幼年時代の懐かしい話を聞きながら、この地が私の父が乃木第三軍の麾下として参戦し、大変な苦戦を重ねた旅順攻囲戦の前哨戦として、金州地峡（東西約五キロ）を扼する南山及び金州城に拠る露軍を、明治三七年五月二五日から二六日にかけて攻撃し、一日余りの戦闘で日清戦争の全期間を上回る弾薬量を消費し、戦死傷者四、三八七名を出して大本営に衝撃を与えた激戦地で、乃木将軍の長子勝典中尉が戦死されたのもこの戦闘であり、乃木将軍が旅順攻略後、第三軍を率いて北上する途次、南山の山頂に立って、この新戦場を俯瞰しながら断腸の想いを託された有名な漢詩、

山川草木轉荒涼　　十里風腥新戦場
征馬不前人不語　　金州城外立斜陽

を思い起こした。

私の父は終戦の年の四月二七日老衰で亡くなったが、その前年秋に私共子孫にどうしてもこれだけは伝えて置きたいと書き残した日露戦争、特に旅順攻囲戦の体験記を初めて公開するが、何かご参考になれば幸いである。

―註―

◇原文は多くの難解な漢字で認められているので、ある程度原文を損なわない範囲で仮名に直してある。

◇原文では冒頭に陸軍大学校を批判する一文があるがこれは省いた。

◇尚、附図が描かれた毛筆書きの原文の一部を本文の中に挿入した。

◇文中に字句の肩に＊印を附した間の箇所は筆者の加筆したものである。

◇文中のルビも原文にはないもので、加筆したものである。
◇挿入の地図、表、写真は日本の歴史（日清・日露戦争）－毎日新聞刊－より転載させて戴いた分と、川瀬大尉が現地より持ち帰り秘蔵していたもの数葉を掲載した。

川瀬金次郎によって執筆された「はじめに」の部分では、川瀬亨が書き残した旅順攻囲戦の体験記を編集してとりまとめたことが、執筆の動機とともに書かれている。対象資料を編集するにあたり、原文を損なわない範囲で、難解な漢字の仮名への修正、加筆、写真などを挿入したとある。この編集において、内容に影響する変更としては、川瀬亨大尉の手記の冒頭にあったとされる陸軍大学校を批判する一文が省かれている点がある[3]。批判文は、それが冒頭にあった文章であることから、川瀬亨が旅順攻囲戦の手記を、記憶を辿りつつまとめた全体をもととした見解による批判と想定されるが、詳細は不明である。

漢詩「金州城」は、対象資料では旅順陥落後に第三軍が旅順から北方へと転戦の途次乃木将軍が詠んだとあるが、川瀬金次郎の記憶違いで実際には旅順攻囲戦前の遼東半島上陸直後の明治37年6月初めである[4]。

昭和63年10月、同地訪問の機会を得た川瀬金次郎が、80有余年前に、父川瀬亨も見たであろう旅順攻囲戦の前哨戦の南山の戦場跡を詠んだ漢詩金州城を思い起こし、おそらくはこの体験が対象資料執筆のきっかけとなったものと推測される。漢詩金州城の現代語訳は次のとおりである。

山川、草木も砲弾跡が生々しく、見渡す限り荒涼とした光景である
戦いがすんだ今もなお血生臭い風が吹いている
私が乗る軍馬は進もうとせず、兵士もまた黙して語らない
夕陽が傾く金州城外にしばらく茫然と佇んでいた

対象資料の著者である川瀬亨の次男川瀬金次郎[5]は、昭和9 年に東京帝国大学農学部農芸化学科卒業後、南満州鉄道株式会社の公主嶺農事試験場技術員となった。その後、農業関連の職務を経て 昭和13年、新京畜産獣

医大学教授に就任した。終戦後は、昭和 23 年にハルピン東北学院教授に就任し、昭和 28 年 11 月の帰国後から昭和 55 年まで新潟大学教授の職にあった。土壌肥料分野を専門とし、学術研究における中国との関係が深い。

昭和 63 年 10 月には上記のとおり、農業技術交流団代表として大連市金州区を訪問し、この後に、対象資料「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」を執筆した。

執筆の具体的時期については、巻末に筆者の肩書きが「東方科学技術協力会副会長」とあることから、昭和 63 年 10 月以後、会長就任の平成 8 年までのいずれかの時期であるが、昭和 63 年 10 月の大連訪問からそれほど時間をおかずに執筆されたものと推測される。

図 3 晩年の川瀬亨　（上村嶺子氏提供）
中将の肩章および勲一等旭日大綬章ほかの勲章を身につける

川瀬亨の略歴について、以後の記述に関わる事柄であることからここでその軍歴[6]について述べておく。

川瀬亨は明治29（1896）年5月27日に陸軍士官学校を第7期生として卒業した。同期に畑英太郎（後の大将）、河西惟一（後の中将）、二子石官太郎（後の中将）、大竹澤治（後の少将）、中村安喜（後の少将）、羽入三郎（後の少将）、壬生基義（後の少将、伯爵）らがいた。

明治37年6月、在学中の陸軍大学の閉鎖と同時に、第11師団管理部付きで旅順に向け出征した。帰還は翌38年9月である。これが対象資料の扱う範囲で川瀬亨の軍人としての唯一の実戦経験であった。

帰還後、再開した陸軍大学校を18期として卒業し、輜重兵隊大尉となる。明治41年、少佐に進級し騎兵学校教官を経て、大正元（1912）年8月に中佐進級とともに、輜重第4大隊長として大阪転勤となる。

大正4（1915）年8月に輜重兵監部部員として東京に帰任し、翌大正5（1916）年から翌年にかけ9ヶ月間にわたり、軍用自動車調査員および観戦武官として第一次大戦の視察・軍用自動車の調査のため欧州に出張した。

大正6年に近衛輜重大隊長、同7年第8師団参謀長を経て、同9年少将に昇進、陸軍の船舶および鉄道輸送を担当する運輸部附、同12年に初代陸軍運輸部長、同13年に輜重兵監となり、同14年に中将に累進し、翌大正15年に待命予備となった。昭和20（1945）年4月27日に71歳で老衰により死去。

3.4 日露戦争の主な戦闘 （対象資料 p.3）

＜付図・日露戦争の主な戦闘＞

「日露戦争の主な戦闘」として図が掲載されている。ここでは、旅順要塞戦から、第二軍、三軍、四軍による得利寺、大石橋会戦、さらに朝鮮半島から進軍した第一軍と合流し、奉天会戦へと転戦する主な陸上の戦闘と、進軍経路を示す図が付されている。第一軍は、朝鮮半島の仁川、平城に上

陸し、日本海に沿って北上する北韓軍と黄海沿いに鴨緑江を越えて奉天に向かう鴨緑江軍の二手に分かれる。第二軍、三軍、四軍は遼東半島に上陸して北進した。第三軍は、遼東半島に明治 37 年 6 月に上陸し、遼東半島先端の旅順において、3 回の総攻撃の後、明治 38 年 1 月に旅順要塞を陥落させ奉天に向け北進した。

3.5 第三軍の組織全体図　（対象資料 pp.4-5）

＜付表・第三軍編成表＞

司令官乃木希典中将（明治 37 年 6 月 6 日大将昇格）、参謀長伊地知幸介少将のもと、第三軍の組織全体図が 2 ページにわたり示されている。

師団・師団長および、旅団などは次のとおりである。すなわち、第 1 師団（東京）伏見宮貞愛親王中将、第 7 師団（旭川）大迫尚敏中将、第 9 師団（金沢）大島久直中将、第 11 師団（善通寺）土屋光春中将、後備歩兵第 1 旅団、後備歩兵第 4 旅団、砲兵第 2 旅団、攻城特殊部隊、野戦電信隊、軍兵站部である。第 7 師団は 203 高地の攻撃にあたり、明治 37 年 11 月に第三軍に組み入れられた。日露戦争に当って 1904 年（明治 37 年）5 月 1 日に編成された第三軍は満州軍に所属し、日露戦争の終結とともに明治 39 年 1 月 26 日に解隊された。第三軍の 4 個師団のうち、川瀬亨大尉の所属する第 11 師団は、四国 4 県（香川県・徳島県・愛媛県・高知県）を徴兵区（第 11 師管）とする。

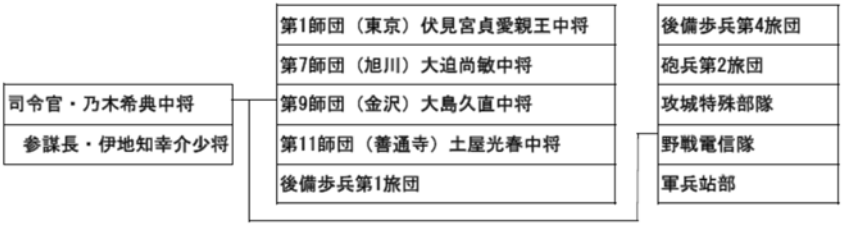


図 4 第三軍の組織構成

旅団とは単一兵科の 2 個歩兵連隊によって構成され、2 個旅団を以て 1 個師団（4 単位師団）を構成する。旅団長は少将が就任するが、師団と異なり参謀長や参謀は置かれず、旅団長の補佐や旅団司令部の実務は旅団副官が行った。

旅団の基本編制は、旅団司令部のもと、連隊本部および歩兵連隊（2 個）、大隊本部および大隊（3 個）、中隊（4 個）、機関銃中隊、歩兵砲小隊（大隊砲小隊）、歩兵砲中隊（連隊砲中隊）、速射砲中隊などによって構成される。

3.6 写真・招魂祭　（対象資料 p.6）

＜写真・招魂祭（明・三八・一・一四）＞

「日本軍は旅順攻略に後方部隊を含めて 13 万を投入し、戦死傷者 59,000、露軍は戦死 7,700、傷病 15,000 を出し、22,000 が捕虜となった。明治 38 年 1 月 14 日水師営北東で第三軍の戦病死者招魂祭が施行された。」

ここでは明治 38 年 1 月 14 日に水師営北東において行われた戦病死者招魂祭の写真が掲載されている。第三軍による旅順攻略は、59,000 の戦死傷者を出した。第 3 回総攻撃では乃木希典の次男の保典も戦死した。このうち 203 高地の攻撃では、兵力 15,000 の第 7 師団は、攻撃開始後のわずか 5 日間で約 12,000 を失った。

写真中央で弔辞を読むのは第三軍乃木司令官で、墓標には「第三軍戦死病死各位之霊」とあり、左側には供物料「金千圓　満州軍総司令官　伯爵大山巌」とある。

3.7 旅順攻囲戦の手記

(1) 動員下令、出征（対象資料 p.7）

▲動員下令、出征の途へ▼明治三七年二月いよいよ日露開戦となり、陸軍大学校は一時閉鎖されて、自分は所属隊たる輜重兵第十一大隊へ帰還し、第十一師団（善通寺）の動員下令と同時に自分の戦時職務である第十一師団管理部付となり、三七年六月三日香川県詫摩港乗船征途についた。

航海中絶えず浦塩艦隊の襲撃を厳戒しつつ遼東半島の一角の塩大澳に上陸、乃木第三軍の戦闘序列の一師団として旅順攻囲戦に従事したのであった。

この旅順攻囲たるや真に師団の悪戦苦闘であって今日でもまざまざと当時の感想が思いだされるのである。当時の記憶を辿り以下其の状況を記述して見る。これは予が現役中の唯一の戦歴であるからである。

＜写真　丹波丸上甲板上にて　（出征途上航海中に於いて撮影す）　第十一師団長・幕僚・管理部・上級副官・第二十二旅団司令部将校、丹波丸船長英国人某、監督将校田中海軍中佐、川瀬大尉（前列左から三人目）＞

この部分以降が川瀬亨大尉の手記で、動員・出征の記録からはじまる。

川瀬亨大尉は明治37年6月3日に所属の第11師団の駐屯地である香川県善通寺付近の現在の詫間港から出航した。乗船した丹波丸は日本郵船所有の貨客船であり、6,100t、乗客定員160人のとして欧州航路に就航していた。

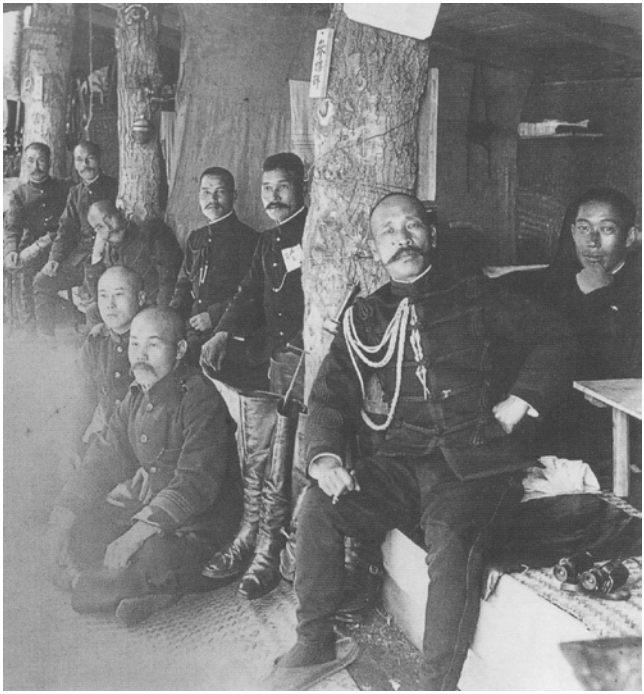


図5 大狐山北麓の参謀部　(明治37(1904)年8月8日)

(出典：朝日クロニクル週刊20世紀－1904明治37年、朝日新聞社刊、1999.12 p.33)

木に掛けた表札に「参謀部」とある。右端が川瀬亨大尉。中央の参謀肩章をつけた人物は第11師団参謀の一人と推測される。この写真は対象資料には含まれないが、川瀬亨大尉が現地から持参した写真のうちの1枚と思われる。

神奈川丸と同型船 7 隻のうちの 1 隻で、第 11 師団将校、第 22 旅団司令部将校らが軍本体とは別に丹波丸にて遼東半島塩大澳に上陸した。

対象資料には丹波丸船上で撮影した第 11 師団長、幕僚ら川瀬亨大尉を含む写真が挿入されている。川瀬亨が現地より持ち帰った写真のうちの 1 枚と思われる。合計 23 名が写る写真で、前列 7 人が甲板の床に直接着座、中列 6 人は椅子に腰掛け、残り 10 人が後部に立つ。対象資料のこの写真は不鮮明なため本稿には掲載していない。

塩大澳上陸後、第 11 師団は旅順の北東部の大狐山北麓に進軍した。川瀬亨大尉の写る同地に設営した参謀部の写真をここに掲載する。日付は明治 37 年 8 月 8 日とある。

(2) 緒戦 （対象資料 p.8）

▲旅順攻囲戦の経緯・緒戦▼　旅順攻囲軍は乃木大将の指揮に属する第一（東京）、第九（金沢）、第十一（善通寺）の三師団を基幹とし、之に攻城砲兵その他攻城特殊部隊、海軍攻城砲兵部隊等より編制せられ、露軍の前進陣地を逐次攻略して、所謂、囲郭の線（本防禦線）に追い詰め、真の要塞戦になったのは三七年八月からであった。

＜写真・土屋第十一師団長(中央)と幕僚・後列左から 3 人目は川瀬大尉＞

6 月の上陸以後の緒戦では、要塞のトーチカ等前進陣地を攻略しつつ、ロシア軍要塞の本防禦線囲の線に追い詰め、これ以後の 37 年 8 月から要塞戦となったとある。掲載を省略したが対象資料では前線における第 11 師団長以下、川瀬大尉を含む 14 名の幕僚の写真が挿入されている。

要塞は前進陣地・本防御線・内部防護線・囲郭・複郭などより構成され、囲郭は，敵の奇襲にたいし核心を防護し、内部防御線陥落後も抵抗を持続することを任務とする。

複郭は，囲郭陥落後も最後の抵抗を行う陣地であり、旅順攻囲戦で困難を極めたのが、機関砲を備えた前進陣地のトーチカである。トーチカとは、元は特火点を意味するロシア語（ｔｏｃｈｋａ）であるが、直撃弾を想定した長さ数メートルから十数メートル規模のコンクリート構造の防御施設である。防御施設としては掩体壕の一種とされる。外形は椀形または矩形体で密閉した外壁で覆われ、銃眼が設けられている。第１次大戦以後、塹壕とともに前線における施設として一般化した。

日露戦争で初めて遭遇したこれらの旅順要塞設備に対する日本軍の認識を示すものとして、次の記述[7] がある。

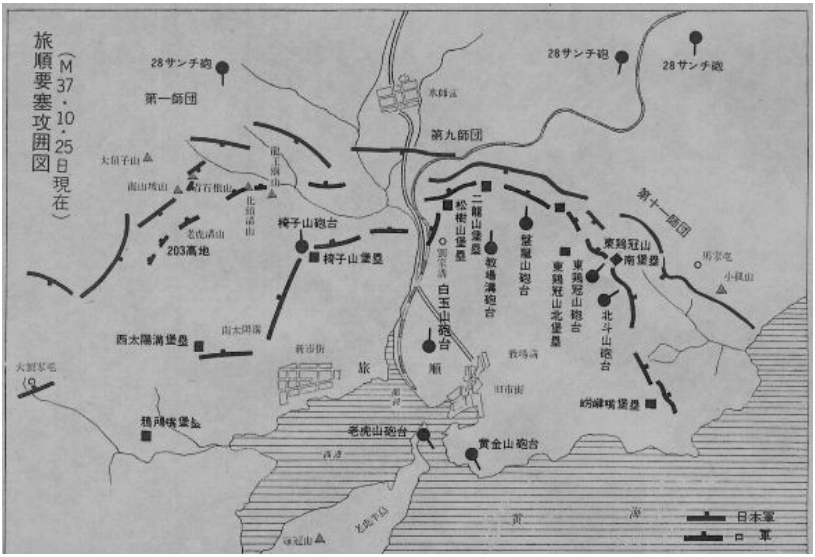


図６ 旅順要塞攻囲図　（明治 37 年 10 月 25 日時点）

（出典：日露戦争　概説４（http://holywar1941.web.fc2.com/kindai2/kindai-nitiro4.html））

第 11 師団は東鶏冠山砲台の前面に布陣し、盤龍山砲台・二龍山堡塁・松樹山堡塁・椅子山堡塁前面を第 9 師団、その西側を第 1 師団がそれぞれ布陣した。第 7 師団の投入は 11 月以降である。

『攻城戦の経験のない日本軍は、旅順要塞に対して準備はきわめて不足のままで立ち向かった。軍略の大家といわれる児玉参謀次長でさえ、旅順の背面に竹矢来をつくって監視しておればよいと考え、竹や縄の所要量を計算されたほどであった。旅順の地形といえば日清戦争のときのもので、その後の防備のことなど皆目わかっていなかった。第三軍が包囲線をつくったとき、日本軍最良の望遠鏡でみても、たいした構造物とはみえなかった。8 月末の第一回総攻撃後、展望哨からロシア軍陣地の背面に窓のたくさんある西洋造りの建物が見えるというので、司令部幕僚がいってみるとまさしく永久築城の掩蔽要塞であった。それとは知らずに第三軍は強襲法によることとし、その攻撃を東北正面、二龍山東・東鶏冠山両砲台の間とした。だがこれは旅順要塞中もっとも堅固なところであった。』

(3) 第一回総攻撃　(対象資料 pp.8-10)

▲旅順攻囲戦の経緯・第一回総攻撃▼第一回の総攻撃は八月下旬に行ったのであったが、これは純然たる強襲法でやったのだが、全然失敗であった。各師団とも九割以上の死傷で殆んど戦果は得られなかった。

＜図・旅順要塞攻城戦＞

第九師団が僅かに磐龍山東西両堡塁を奪取したのみで、他は全部戦線を攻撃開始時の線まで後退せしめたので、攻撃目的は殆んど達成出来なかったのである。

その後の攻囲戦の方針については指導者たる軍司令部の参謀と実行部たる師団参謀の間に意見の相違もあって、緊密な連携を欠いていて作戦が順調に進まなかった。

旅順要塞は相当手ごわい戦闘をやらなければ攻略は困難であること

は覚悟はしていたが、こんな不結果に終わるとは予想だにしていなかったので、各隊の精神上の打撃は非常に大きいものがあった。

若し、ロシア軍にして真に機動を富むか、或いは優秀なる要塞最高の指揮官であったなら、日本軍のこの大打撃の機会を必ずや利用して大出撃したであらう。

若し、このような事態が起きたなら日本軍のその后の作戦は如何になったであらう。

当時、自分はその事について大いに憂慮したのであったが、遂にその事なく、敵は徹頭徹尾守勢をとったので、幾多の損害を蒙り莫大な犠牲を拂ったが、軍の保全だけは出来たので不幸中の幸いであった。

明治 37 年 8 月下旬の第一回総攻撃が失敗に終わり、大きな損害を被ったことが記されている。参謀業務に就いていた川瀬亨大尉の記録によれば、失敗は参謀本部の想定外であったことが窺える。ロシア軍が日本軍の大打撃に乗じて攻勢に転じることなく篭城戦に徹したことも想定外であった。まったく歯が立たなかった第 1 回総攻撃の失敗は戦意にも大きな影響を与えた。なお、対象資料に挿入されていた図は不鮮明なため省略した。

乃木第三軍は当初の計画では、極力早期に旅順要塞を陥落させ、転進して北方のロシア軍と交戦することであった。加えてバルチック艦隊出航前に旅順艦隊を撃破という海軍の要請にも配慮を強いられた。そこで、旅順攻囲戦は、ロシア軍の状況も把握できないまま 8 月 19 日に開始したが、対象資料にあるように完全な失敗に終わった。第一回総攻撃の失敗により日本陸軍は旅順攻囲戦を継続しつつ同時に北方の遼陽の会戦を戦うこととなった。

予想外のロシア軍の頑強な要塞施設の攻城については、第一回総攻撃の失敗で早くも意見が分かれたことが記されている。

攻囲戦における軍司令部参謀と師団参謀の意見の相違とは、攻撃方法について強襲法により速やかに落城させるという軍指令参謀の意見に対し、

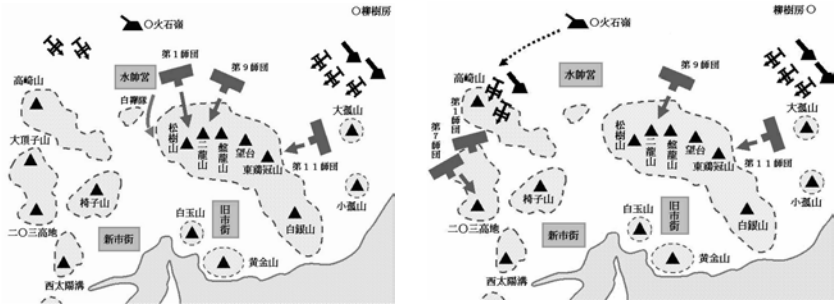


図７ 第１回（左）、第２回総攻撃（右）の陣容

（出典：http://www.sakanouenokumo.com/　旅順要塞攻略戦③）

正面左翼の 203 高地に第１、第９師団が布陣し大砲が移設された。

要塞の破壊工作を逐次行いつつ突撃する正攻法が必要であるとする師団指令部の意見との相違である。

一方、失敗に終わった第一回総攻撃であるが、第三軍はすでに携行弾薬の約４分の３を消費したといわれる弾薬不足に陥っていた。不足分はドイツのクルップ社（克虜伯）、イギリスのアームストロング社といった外国の兵器会社に対し砲弾を注文して弾薬不足を補う事になった[8]。

８月 28 日には満州軍総司令部から次の訓示があり、第三軍乃木司令官はこの訓示に従って、弾薬節約の訓示を各師団へ出した。

『訓示　８月 28 日午後４時　於柳樹房　過般満州軍総司令官ヨリ弾薬節約、疾病予防ニ関シ左の訓示アリ　各部団隊長ハ宜シク其趣意ヲ体シ部下ヲ戒飾シテ欠漏遺漏ナキヲ期スベシ　第三軍司令官男爵乃木希典』

(4) 川瀬亨大尉師団参謀部業務に就く　（対象資料 pp.11-12）

▲旅順攻防戦の経緯・第一回総攻撃失敗後、師団参謀部へ▼

この第一回総攻撃で第十一師団司令部では突撃第一日の明け方酒井

大尉、堀内少佐の両参謀が師団長の傍で勤務中、敵砲弾の破片で戦死したので、桑田大尉は砲兵中隊長として戦闘中であったので直ちに参謀として司令部に馳せ参じたが、他の一名は参謀候補として小山大尉も氷室大尉も何れも第一線の歩兵中隊長又は旅団副官として勤務中であったが、命課せられた時には何れも戦死していて補充できなかった。

そこで、自分のその時の勤務は頗る閑散なもので要塞戦では殆んど用がないので参謀部の手傳を仰せつかり、その后ずっと参謀の業務を執るようになったのであった。

参謀の業務を執ったことは事実であるが、まだ大学校の学生ではあるし、正式に参謀の命課を受けたのではなく表向きは何処までも師団管理部付であるから、専ら参謀業務の補助、或いは司令部内の蔭の仕事で終始したのだが、この戦闘で第十一師団の名聲を揚げ、同時に是非とも要塞攻略の目的を達成せなければならないことを心に念じ、大いに精勵したつもりである。

＜写真・土屋師第十一師団長と幕僚（大狐山北麓にて）　中央白髪の将軍は土屋師団長・他参謀副長など・川瀬大尉（後列左から三人目）（明治37年8月29日米国写真師Rica氏来たり撮影す）　－大狐山北麓、旅順はここから指呼の間にあり・后方天幕は電信隊、右方の砲弾は敵の発射せしものなり。后方遠く見えるのは兵隊が目下体操中である。－＞

＜写真・一大狐山北麓師団司令部の宿舎一（明治37年9月）向左一師団長、参謀長の宿舎・向右一参謀部の宿舎・ここの樹木にいる鳥は小狐山の麓で捕らえたる鷹にて大いに人に馴れり。　左より－桑田参謀長・山田参謀・内野参謀・川瀬大尉　室内は－松本副官・岡崎曹長＞

第1回総攻撃において、第11師団司令部では突撃第一日の明け方に2名の参謀を失った。この後補の参謀候補も戦死のため、砲兵中隊長の大尉

とともに、川瀬亨大尉が師団管理部付けの立場で参謀業務に就いた、とある。

同様に布陣した攻囲戦で前面のロシア軍の要塞に対峙する第 1 師団、第 9 師団を意識し、所属の第 11 師団の名声を上げるべく要塞攻略を果たすために精勤したことが記されている。

対象資料に掲載される 8 月 29 日の写真は中央の土屋師団長以下、川瀬亨大尉を含み 16 名が 3 列に並んで写る。もう一枚の 9 月の写真は師団長・参謀長の宿舎と参謀部の宿舎が並んで写る。不鮮明で判読は難しいが、建物は林を背後に建つ仮小屋の様に見られる（不鮮明につき掲載略）。

(5) 要塞攻囲戦における強襲法と正攻法　（対象資料 pp.13-14）

▲旅順攻囲戦の経緯・攻撃遅々として進まず▼　旅順第一回総攻撃失敗后の軍の作戦方針は大体正攻法でやることになったが、要塞正攻法などの経験は日本軍で絶無なため、これに関して自信ある方法を立てることなど思いもよらないことであるのと、正攻法では何分時日が大変とかかるし、第三軍をいつまでも旅順方面に引きつけられていては満洲軍の北方における主力作戦の力を弱める上に海面封鎖に任じている聯合艦隊の方ではバルチック艦隊の東航いよいよ事実となれば、一日も早く旅順港内に蟄伏している敵太平洋艦隊の残存勢力を撃滅しなければならず、それには旅順要塞の陥落は一日も早く完遂しなければならぬから、正攻法のような時日のかかる作戦は甚だ不適当で、やはり強襲法で一気呵成に攻略を希望していたのが軍司令官始め軍幕僚の考えであった。その後の作戦は一方では正攻法で穴を掘りながら進みつつ、他方ではやはり強襲法をやったのである。

第二回、第三回の総攻撃は即ちそれであった、何れも不成功に終わり、多大の損害を蒙ったのみであった。

それで、当時我々の師団司令部では強襲は到底不成功で徒らに損害を蒙るのみであるから、正攻法より外に方法のないことを主張したが、

軍司令部では全体の関係、就中、海軍の主力を早く内地軍港に引き揚げ艦船の整備をして、やがて我が国の近海に出現するバルチック艦隊と雌雄を決するための最善の状態にしなければならず、それには港内の敵残存艦船を打ち破らねばならないので、不成功とは知りつつ強襲をやったのであって、師団長としては軍司令部と部下の各部隊との間にあって随分苦心したのであった。

旅順攻囲、正に半歳に近からんとし、しかも軍正面の敵の堅塁は毫も衰える色なく、依然頑強に抵抗を続けていたのであったが、いつの間にか師団全面の敵の主要堡塁を強襲しても徒らに犠牲を拂うに過ぎないと考え始めた。

＜写真・日本軍が掘削した爆破坑道（クロパトキン砲台）＞

第1回総攻撃は失敗に終わったが、旅順港内の残存艦船の撃滅を迫られていた軍司令部は、なおも強襲法により一気呵成に攻略することを求めてきた。これに対し、第11師団では第2回、第3回の総攻撃で正攻法も取り入れたことが記されている。しかし、坑道を掘削して前進する正攻法と同時に強襲法をやった、とあるが、いずれも不成功に終わり、多大な損害を蒙った。なお対象資料の写真は不鮮明なため掲載を省略した。

強襲法と正攻法について、師団司令部と軍司令部の間で見解が分かれ、師団長は軍司令部と部下の各部隊との間にあって随分苦心したとある。しかし、前線の認識としては、各師団前面の主要堡塁を強襲してもいたずらに犠牲を払うに過ぎないとの認識が広がっていたことが記されている。

第2回総攻撃は明治37年（1904年）10月26日に開始された。この攻撃の目的は、松樹山砲台から東鶏冠山砲台の間に位置するロシア軍の砲台や堡塁を奪い、劉家溝の北方から毅後軍副営の北方に至る一帯の高地を占領することとされていた[9]。

第2回総攻撃では、国内に配備されていた28サンチ砲を撤去・分解し

て戦地に輸送して配備された。28 サンチ砲は、本来は艦船攻撃用に砲台に設置されるものであったが、陸上の施設や部隊に対する砲撃用として転用された。転用された 28 サンチ砲を用いた攻撃は、第三軍に配属されていた海軍の陸戦重砲隊と陸軍の砲兵部隊が担った。

10 月 26 日に開始された総攻撃では 28 サンチ砲による砲撃が行われ、初日の戦果としてロシア軍側の砲台の破壊や火薬庫の爆発が第三軍から海軍に報告されている。

10 月 30 日の午後 1 時頃から開始された一斉攻撃では、ロシア軍の砲台に対する突撃が試みられた。しかし、第 1、9、11 の各師団の正面に位置する松樹山砲台、二龍山砲台、東鶏冠山北砲台の重要な 3 砲台は、外濠、側防施設に護られて日本軍の攻撃を退け、第 1 回総攻撃と同様に攻略は失敗に終わった。わずかな戦果は P 砲台と呼ばれる砲台 1 か所の占領したことであった [10]。

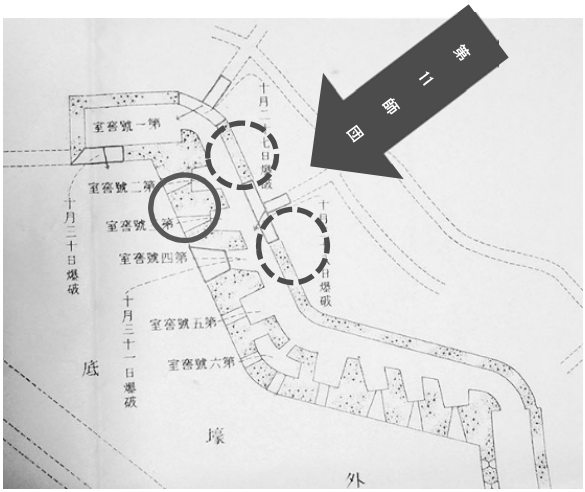


図 8 東鶏冠山北堡塁の外濠側防施設 [11]

「この側防施設のベトン壁を最初に手前（破線円の部分）を 10 月 27, 28 日に、次に実線円の敵側の部分を 30, 31 日に爆破したが・・・」にあたる。

この時点で総攻撃は中止され、第２回総攻撃は失敗に終わった。

強襲法の速攻で攻撃を繰り返すべしとする軍司令部に対し、失敗の繰り返しから、正攻法以外には攻略の方法がないとの実戦経験に基づく意見をもつ師団側はかなりの不満をもっていたものと推測される。そこで、軍司令部の指示どおり強襲法を繰り返しつつも、正攻法の準備を同時に進めていた。

対象資料に掲載された写真には、正攻法の準備として進められた爆破のための坑道の掘削の様子が写る。

(6) 攻撃重点を 203 高地に変更　(対象資料 pp.14-16)

▲旅順攻囲戦の経緯・攻撃重点を二〇三高地へ▼　港内蟄伏の敵の艦船を撃滅するだけならば、内地の海軍要塞から取り外して攻囲線の所々に据え付け終わった二八糎砲を以てする射撃で十分目的を達することが出来るのである。

ただ、この砲の射撃をするのには敵の艦船を目撃し得る観測所を占領しなければならない。

しかも、この観測所も現在攻囲軍の占領している陣地内では何処も適当な場所がない。

そこで、二〇三高地の攻略が始まったのである。

この高地は敵陣地の一部で旅順港内を俯瞰し得る唯一の高地で、初めは敵守備兵力も僅少であったが、我が軍が攻撃を始めると、その兵力を増し、工事も夜を日に継ぎて堅固とし、なかなか容易に奪取することが出来ず、これまた随分多くの犠牲を拂い悪戦苦闘の後、一二月中旬、この高地の一角に足場を得たので、直ちに此処に砲兵の観測所を設け直ちに港内の艦船に巨弾の雨を降らし、瞬時にして敵艦船を撃滅することが出来たので、東郷艦隊の主力は内地に引き揚げ、バルチック艦隊の東航に備える準備に取り掛かったのである。

二〇三高地占領以来、我が攻囲軍には益々活気を呼び起こし、過去の攻撃失敗以来の空気とは全然相違せし感を起こさせるようになったのは当然で、その反対に敵の方は我に対する射撃などは著しく減少し、何んとなく敵もそろそろ降参するのではないかという風な気がして来たのであった。

＜写真・旅順艦隊を砲撃する二八糎榴弾砲　12 月 5 日二〇三高地を攻略すると直ちに砲兵観測所を設け、6 日から 28 糎砲で旅順艦隊を砲撃した。同砲は海岸要塞砲を転用したもので最初は 6 門だったが、計 18 門に達した。＞

第 3 回総攻撃は、明治 37 年（1904 年）11 月 23 日午前 11 時付で乃木希典大将名義の第三軍命令として、26 日に「攻撃再興し望台一帯の高地を奪取せん」として出され、11 月 26 日に開始された。目標は第 2 次総攻撃と同様に、松樹山・二龍山・東鶏冠山といった高地の砲台や堡塁に対し、突撃が繰り返し行われた。しかし、犠牲は増す一方で、わずか翌日の 11 月 27 日午前 10 時付で攻撃中止、更に 203 高地の奪取に攻撃を変更する命令が出された。以下は、中 2 日を挟み、相次いで出された 2 通の第三軍命令である。

○11 月 23 日付け第三軍命令[12]

『第三軍命令　11 月 23 日午前 11 時　於柳樹房　一．軍ハ来ル 26 日ヲ以テ攻撃を再興シ望台一帯ノ高地ヲ奪取セントス　1．総予備タル第九師団ノ歩兵一大隊ハ原師団ニ復帰セシム　一．第一、第九、第十一師団ハ各攻撃地区に拠ヒ午後一時三十分ヲ期シ松樹山、二龍山、東鶏冠山北砲台及ビニ龍山以東一戸堡塁ノ前面ニ至ル旧囲壁ニ向ヒ突撃ヲ実施シ次イデ相協同シテ松樹山砲台南方面高地ヨリ毅後軍副営北方高地ヲ経テ東鶏冠山砲台ニ至ルノ線ニ進出シ挟線ヲ占領スベシ』

○11 月 27 日付け第三軍命令[13]

『第三軍命令　11 月 27 日午前 10 時　於松風山東南高地　　一．軍は一時現攻撃正面ニ於ケル攻撃ヲ中止シ更ニ 203 高地ヲ攻撃トシテ之ヲ奪取セントス　二．攻城砲兵ハ今ヨリ 203 高地ニ對スル砲撃ヲ開始シ主ニ 28 珊知榴弾砲ヲ以テ敵堡塁ニ向ヒ破壊射撃ヲ施行スベシ』

海軍の聯合艦隊は以前より、旅順港内停泊艦船の観測ができる 203 高地を占領して、陸上からの砲撃によって港内蟄居のロシア海軍旅順艦隊を攻撃するという考えを主張していた。

とくに、連合艦隊参謀の秋山真之は、203 高地もしくは鶏冠山方面の旅順港内を見渡せる地点を占領する見込みがあれば旅順要塞は陥落すると考えており、陸軍の第三軍と海軍の連合艦隊が連携をとる必要を強く主張した。その一環として、連合艦隊司令長官の東郷平八郎の命を受け、第三艦隊参謀の岩村団次郎中佐と伊集院俊大尉の 2 名が第三軍の司令部に派遣されていた。

これは、岩村団次郎中佐と伊集院俊大尉の 2 名が第三軍の旅順総攻撃に参加する中で記した『旅順攻囲軍参加日誌』(pp.49-52) に記された「秋山聯合艦隊参謀書信要旨」に示されている。

この書信要旨には、『前略・・・前便ニモ申シ上ゲタル如ク二〇三高地モシクハ鶏冠山方面ニテ港内ヲ瞰視シ得ル地点ヲ占略スル見込サエアレバ陥落スベシト思フ・・・後略』とある。

しかし、第 3 回総攻撃開始の時点では海軍、大本営、および陸軍内部では、意思統一がはかられず、目標が絞られていなかったが、第三軍の 11 月 23 日付けの命令による同月 26 日の攻撃が、開始してすぐに失敗したことによって、203 高地の占領を目標とすることにようやく一致した。

なお、大本営はすでに 11 月 4 日の御前会議で 203 高地を主攻撃目標とすることを決めていた。

対象資料では、攻撃目標の急遽の変更に対する第三軍内部での批判などは特に触れられていないが、この大きな変更がわずか数日で行われたことに対する驚きはあったものと推測される。

しかし、203 高地に向け、28 サンチ砲を始めとする砲撃や、第 7 師団の突撃による攻撃が開始されると、日露両軍は正に一進一退の状態となった。

ロシア軍は日本軍の目標変更の動きを見て 203 高地の守備兵力を増強し、両軍の戦闘は非常に激しいものとなり、11 月 30 日、第 7 師団が 203 高地南西部の堡塁を、ついで東北部の堡塁を占領したが、即座に南西部の堡塁は奪還された。しかし、12 月 5 日、第 7 師団は再びこの南西部への突撃攻撃を決行し占領した。

以下はこの 12 月 4 日付けの乃木司令官の命令書[14]である。

『第三軍命令 12 月 4 日午後四時、於柳樹房　第 7 師団ハ 5 日午前 9 時頃 203 高地西南部ニ突撃シ奪取スル筈ナリ　第 1 師団、攻城砲兵、野戦砲兵、第 2 旅団ハ従来通リ第 7 師団攻撃援助第 9、第 11 師団ハ引キ続キ前面ノ敵ヲ牽制　攻城砲兵ハ第 7 師団ノ攻撃ニ応ジ状況ノ許ス限リ 203 高地西南部ノ観測所ヲ利用シ可也多クの砲数ヲ使用シ時機ヲ失セズシテ港内敵艦ニ対スル砲撃ヲ開始スベシ　第三軍司令官男爵乃木希典』

203 高地占領後、当初の計画どおりにロシア海軍第一太平洋艦隊（旅順艦隊）への砲撃が強化され、戦艦ペレスヴェート、戦艦レトヴィ（井）ザン、戦艦ポベーダ、巡洋艦パルラダなどが次々に沈没、自沈、航行不能となった。 12 月 23 日には日本海軍連合艦隊から大本営に対し、旅順港内のロシア艦隊が全滅したとの報告が、以下の通りなされた[15]。

『聯合艦隊告示第二一六号　十二月二十三日聯合艦隊司令部　二十二日附左ノ通リ大本営ヘ報告セラレタリ　勇武絶倫ナル攻囲軍ノ猛烈不撓ナル攻囲軍ノ猛烈ナル攻撃ニ依リ旅順ノ死命ヲ制スベキ 203 米突高地カ我軍ノ有ニ帰シテヨリ港内敵艦隊ニ対スル攻城重砲ノ発射益々其威力ヲ逞フシ「ポルタワ」「レト井ザン」ハ忽チ沈没シ「ポビヘダ」「ペレスビエット」「パルラダ」「バーヤン」モ相次テ撃沈セラレ独リ「セバストポール」ノミ去ル・・・以下略』

他の地点のロシア軍に対する攻撃も順次進められ、1905 年（明治 38 年）の元旦が明けるころには、東鶏冠山（12/18 第 11 師団）、二龍山（12/28

第９師団)、松樹山（12/31 第１師団）の各砲台の占領が完了したことが、乃木司令官より次のように報告されている[16]。

『第三軍命令　一月一日正午　於柳樹房　軍ハ前日来ノ数戦闘ニ依リ確実ニ東鶏冠山北、二龍山及松樹山ノ三砲台を占領セリ（以下略）　第三軍司令官男爵　乃木希典』

明治 38（1905）年１月１日、ロシア軍旅順要塞司令官ステッセルから第三軍司令官乃木希典に対して降伏（旅順開城）の申し出があり、日本軍はこれを直ちに受け入れ、翌日には水師営で両軍の全権委員により「開城規約」が調印され、戦闘が停止した。

以降、この規約に従って旅順要塞の日本軍への引き渡しの手続きが進められ、１月５日には、乃木とステッセルが水師営で会見を行った。

ステッセルの降伏申し入れは、明治 38 年１月１日午前９時受領としてステッセル将軍名で､「交戦地域全般の形勢を考察し今後における旅順口の抵抗は不用であり、無益に人命を損せさるため余は会場に付談判することを望む　もしこれに同意するのであれば開城の条件順序などを討議する委員を指名し、会合するする場所を選定されたい」という内容であった。

１月１日の乃木将軍、ステッセルの会見の翌１月２日に旅順口開城規約が両軍の全権委員によって全 11 条で構成される開城に関する規約が結ばれた。なお、対象資料掲載の写真は不鮮明につき掲載を省略した。

(7) 東鶏冠山北堡塁を攻撃　（対象資料 p.16）

▲旅順攻囲戦の経緯・第十一師団東鶏冠山北堡塁を攻撃▼　一二月一八日には我が第十一師団が全力を挙げて攻略に従事した東鶏冠山北堡塁を完全に爆破して、これを占領することが出来た。

この堡塁は旅順要塞の陸正面における三大堡塁の一つであって、岩石質の高地を利用して構築したる堅固なる防禦設備を有する堡塁で、第十一師団が八月の第一回総攻撃以来しばしば突撃を試みしも、その

都度犠牲を拂うのみで奪取の目的を果たすことを得ずに、今日に及んだものである。

　この堡塁の攻略には単に肉弾を以て突撃するだけでは到底不可能であるから、これを根底から爆薬の力で破壊する計画を立てて、その工事を進めていたのであるが、土質が堅く爆薬を装置するための掘開作業が昼間は敵の銃砲火に妨害されるので、夜間に実行しなければならない不便があり、なかなか思うように進捗せず、この爆破の基礎工事だけにも少なからず困難を嘗めたのである。

旅順は、三国干渉によってロシアが支配する以前にすでに清国の軍港であり、周囲は一定規模の防御施設が存在した。ロシアは占領後、1901 年から地形的にも不利な旅順港周囲の施設の防御能力向上の改築工事を開始した。着工当初の計画では、防御施設全体の規模はかなり大規模なもので、大孤山から 203 高地までもカバーする範囲に常駐守備兵 25,000 を配置するものであった。しかし、実際に施工されたのは、常駐守備兵 13,000 とするもので当初より大幅縮小の規模となった。

旅順要塞の大きな欠点は港に近すぎることにより、要塞包囲の敵軍の重砲は、防衛線内の砲台の標的外となる安全な位置より港湾部を射程内に収めることができたことである。大孤山や 203 高地、海鼠山などから旅順港の目視観測が可能であり、停泊艦船への弾着状況の確認もできた。この欠点を補うために開戦後に防衛線外施設として前進陣地や前哨陣地を追加的に設けたが、要塞施設としては完全ではなかった。

要塞強化の工事は 1909 年に完成を予定していたため、1904 年の開戦時点では、工事進捗率は約 40%に過ぎず、未完成の状態で日本軍の攻撃を受けることとなった。

旅順要塞は、東側より反時計回りの円弧状に、白銀山、東鶏冠山北および南堡塁、盤龍山北、東および西堡塁、松樹山各堡塁、標高 185m の観測地、永久砲台、旧囲壁および臨時築城陣地の各施設で構成されていた。旅

順攻囲戦開始時にこれら東側の各防御施設の正面に第11師団、第9師団、第1師団の3個師団がそれぞれ布陣することになる。

西側要塞群については、北正面の旅順港に近い椅子山から大案子山、龍眼北方、水師営南方の各堡塁、砲台・野戦築城陣地などが配置された。第2回総攻撃後の明治37年11月に第7師団が203高地攻撃に投入されることになる。

旅順港西方の新市街地の背後には、西太陽溝などの堡塁で構成されていた。防衛線外には、東側の大小孤山、北側の水師営付近、西側の203高地付近にそれぞれ前進陣地を整備したが開戦時に全ては完成していなかった。

全方向からの敵の攻撃を想定して計画された旅順要塞は、主防御線が外周にコンクリート（ベトン：露語бетон　仏語béton　独語beton）の壁を巡らしていた。半永久堡塁8箇所、堡塁9箇所に加え、永久砲台6箇所、多角形の散兵壕をもつ角面堡4箇所より構成され、第2防衛線内側の高台には砲台が設けられていた。これらの各堡塁や砲台は相互に塹壕によって繋がっていた。主防御線の内側には、旧旅順市街を囲むように副郭が設けられ、主防御線内への敵軍の侵入後の備えとされていた。

旅順要塞全体に配備されたロシア軍の火砲は合計646門で、内訳は要塞砲350門、海軍砲186門、野砲67門、そして捕獲砲が43門であった。これらの火砲の約80%が陸上正面に配備され、第三軍との攻囲戦に使用された。それ以外は予備8門を含み海上の対艦船用として配備されていた。

開戦時には、満州配備のロシア軍6個師団の3分の1に当たる2個師団約 30,000 が旅順要塞地域に配属された。これにあらかじめ配備されていた要塞守備兵力や工兵などを合計すると、旅順要塞の開戦時の兵力は約42,000であった。

旅順要塞を含む付近一帯の防御を任務とするロシア関東軍の司令官はアナトーリイ・ステッセル中将で、旅順要塞司令官はコンスタンチン・スミルノフ中将であった。なお、旅順守備部隊の第7師団長ロマン・コンドラチェンコ少将は12月18日の北堡塁の爆破で戦死した。

図 9 東鶏冠山北砲台西側外濠内の破壊された建物の外観

（出典：資料：『研究蒐録地図』昭和 19 年 3 月号 口絵写真）

砲弾は建物外壁を破壊し地下室で会議中の将校が爆死

図 10 日本軍による東鶏冠山北堡塁の坑道爆破

（出典： 絵葉書「満州 旅順東鶏冠山爆破の光景」）

明治 38 年 12 月 18 日午後 4 時、爆破に続き第 1 突撃隊が突入して北砲台を奪取した。

日本軍の堡塁破壊を阻んだコンクリート（ベトン）構造は当時の技術界では新材料として着目され、技術開発の段階にあった。1904 年 1 月にはパリで「第 8 回鉄筋コンクリート展覧会」が開催されている。国内では明治 23 年に横浜港の岸壁工事で初めて鉄筋コンクリートが採用された。

コンクリートの材料であるセメントは明治初年から輸入に依存したが、国内生産も明治 4 年の深川セメント製作所の創業から始まり、明治 11 年には国内需要の 50%を国産セメントで賄った。しかし、明治 14 年に小野田セメント、明治 16 年に浅野セメントの前身が生産を開始したが、生産が需要に追いつかず、明治 22 年には輸入量がピークに達した。

図 11 旅順港陥落時の港内

（出典：http://www.sakanouenokumo.com/　旅順要塞攻略戦③）

旅順艦隊は艦船を旅順港東側の水深の浅い海域に移動し、日本軍の砲撃に対して被害を抑えるために、弾薬を陸揚げし、自ら注水・着底させた。当初は、28 糎砲により軍艦が大破着底と戦果の報告がなされた。ロシア艦船のうち被害の少ないものは戦後、引き揚げて修理の上、日本海軍の艦船として使われた。たとえば、戦艦ポルタワ（11,000t）⇒丹後、レトヴィサン（13,000t）⇒肥前、アリヨール（14,000t）⇒石見、他数隻がある。

この後、鉄道の全国拡張にともなう工事量の増加に伴い、国内セメント産業の生産量は急速に拡大した。特に日清戦争後になると、新たなセメント生産の企業が設立され、急増する国内需要を満たした上、朝鮮、清国を初め海外へ輸出されるようになった[15]。

(8) 東鶏冠山北堡塁爆破作業の経過　(対象資料 pp.17-24)

▲旅順攻囲戦の経緯・第十一師団東鶏冠山北堡塁爆破作業の経過▼
正攻法によってこの堡塁の外濠を前端に達したので、この濠を越えて敵の拠っている胸墻の爆破作業を始めなければならないのだが、この外濠にはペトン製（コンクリート製）の外濠側防設備（カポンニェール）が完備しているため、外濠に飛び込めば後方から、また側方から敵の射撃を受けるので、先ず、外濠側防設備を破壊しなければならないので、爆薬でこれを破壊した。

今、その当時の状況を父が記憶せるだけを記述しておきたいと思う。

もっともこんなことは軍事専門のことであるから、書きものを見ただけではよく諒解出来ない点は多々あるけれども、軍人である父が一生涯のうちで一番重大な出来事と思うから、記録に留めておきたいのだ。

☆外濠を廻って堡塁の内部と通じているから、日本軍の突撃隊が外濠に飛び込めば、後方又は側方から敵の射撃を受けるから、この側方設備を完全に占領しなければ堡塁の奪取は出来ない。そこで坑道を掘って、この側防設備のベトン壁を最初手前の部分を、次に敵側の部分を爆破したがそれだけではまだ不十分で、その次には側防施設内の敵の妨害を除去しなければならないので、くらやみの内で戦闘して所要の部分を占領しそこで胸墻爆破の立脚地を占領したのである。☆

―註―　☆―☆間の原文及び附図　（註：上記☆-☆の部分の川瀬亨の手書き原文、および説明図がここに付されている）

以上の作業をしてから、いよいよ堡塁の胸墻の中腹に爆薬を装置したのだが、これを装置するための工事は夜間行った。

然し、岩石のような土質で進捗せず中々の難工事で、一一月二六日に行われた第三回総攻撃の時には六〇〇キロの爆薬で爆破したが、胸墻の一部が破壊されたのみで、堡塁の大体には何の影響もないので、その後さらに爆薬の強度を二、五〇〇キロに増加し、その工事を急ぐことにし、一二月半ばようやく出来上がったので、同月一八日午後四時大爆発を行い、これに続いて突撃隊が突入して堡塁占領の目的を達成し得たのである。

二、五〇〇キロの爆薬をどうして手にいれることが出来たかというと、これは敵が大連（当時のダルニー）に遺棄したものを我が軍で鹵獲したものである。

またこの爆発工事の計画始動に任じたのは工兵第十一大隊の高田工兵中尉であった。この爆薬を装置するのに胸墻に一米平方の坑道を掘り、大体坑道の入口より五米位の奥まで掘り進み、これを主坑道とし、その左右にさらに五本位の坑道を二米乃至三米の深さに掘り、その先端の所に爆薬を装置し、電流を通じると全部一斉に点火するようにしたのである。

爆薬の装置は、一二月中旬頃大体出来上がったので、北堡塁奪取の計画を立てる際、いよいよ一八日に実行することに決定し、爆破の時刻は敵の不意を襲うため、彼等が晝食後二時間位午睡する時を選び、午後二時と決定、爆破と同時に歩兵の突撃隊を三隊編成、一隊は約五〇位とし、第一の突撃隊は最前線の既に我が軍の占領下にあるカポンニェール（側防設備）内に、第二、第三の突撃隊は第一、第二の歩兵陣地に待機していたのである。

この爆破計画も予定の時刻に実行することが出来なかった。それは、爆破装置の電線が敵の爆弾にあたり切断されたからで、この電線を繋ぎ、ようやく午後四時爆破を実行することが出来た。今度は完全に爆破

が出来て、殆んど計画通り北砲台の胸墻の大半を破壊したのだ。

この爆破に続いて、予定通り第一の突撃隊が突入して、破壊した胸墻の残部、すなわち、敵方の部分に位置を占めて敵と睨み合っていた砲台を占領することが出来たので、師団長始め師団幕僚の喜びは大変なもので、これまで兎角作戦の前途に対し不安があったが、この時から暗中に一点の光明を見出したような気分が起り、もう占めたぞ、という気分が各隊将兵の間に起り始めた。

ことに攻囲三個師団のうち、第十一師団が魁となって三永久堡塁（即ち、第一師団では松樹山砲台、第九師団では二龍山砲台、第十一師団ではこの北砲台の奪取を担任）の一つを奪取することが出来たので、従来兎角、軍司令部の評判のあまり香んばしくないのが、これで名誉恢復が出来るのだという気分もあって、一同大いに安心したのだ。

しかも、この永久堡塁占領の方法も別に軍司令部から指導されたり教えられたりしたのではなく、師団の幕僚の考案と第一線各部隊就中、工兵隊の攻囲間の実戦的経験で案出されたものである。これが見事に成功したことは実に愉快なことであった。旅順攻囲戦のことを記述することはこれで止める。

自分の極めて平凡な生涯のうちこのことが一番重大な事柄であるのと、何にか困難な事に遭遇すると、いつもこの攻囲戦の苦心を思い出して何んだこれ位のことはという気持ちになるので、この事を特に記述したのである。

＜写真・北砲台爆破（銃眼より撮影）＞

＜写真・12 月 18 日攻略の東鶏冠山北堡塁防備を固める第 11 師団同師団は第 2 次総攻撃の東鶏冠山北堡塁で苦戦　31 日の攻撃中止まで 2 ケ大隊が全滅または半滅するという大損害を受けた＞

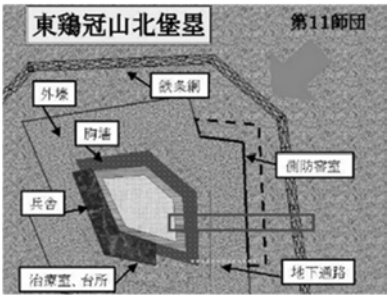
＜写真・戦死者を埋葬する露軍（ロシア側撮影）＞

＜写真・明治 38 年 1 月 13 日入城式が行われた　前進陣地攻略以来、155 日目であった。＞

ここでは、坑道掘削により前進する正攻法によって堡塁外濠の前端に達した以後、胸墻の爆破作業に先立つ外濠側防設備（カポンニェール）をめぐる攻撃について記している。東鶏冠山北堡塁爆破作業の経過を述べるこの部分は、川瀬亨大尉が自らの体験でもっとも書き残したいと考えた箇所である。

東鶏冠山北堡塁は、外濠の周囲に内部に通路の設けられた堡塁がめぐらされ、堡塁内部から外濠に侵入した攻撃側の兵を背後から攻めることができる構造となっている。この施設は、要塞の濠内部に侵入した敵を殲滅する目的で、欧州の城砦で設けられるカポンニェール（仏 caponnière、英 caponier、外濠側防施設、側防窖室）という施設である。

内部の兵は、濠に侵入した敵を銃眼から側方ないし後方から射撃ができる。もともとは、要塞側から外濠に突き出た内部空間を有する施設であるが、旅順要塞では、外濠の外側（要塞の外側）に外濠に沿って内部に空間



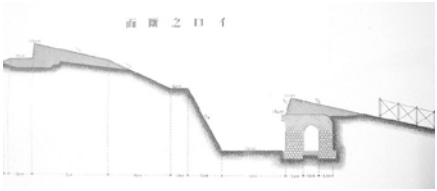


図 12 東鶏冠山北堡塁平面図（左）および断面図（平面図で四角に囲った部分）

（出典：http://www.sakanouenokumo.com/東鶏冠山北堡塁②）

をもつ施設を外濠側防施設となっている。

旅順攻囲戦は日本軍にとって初めての要塞攻略の実戦経験であったが、当時の軍人の重要な参考資料であったヴォーバンの要塞攻囲論（Traité de l'attaque des places）に基づく塹壕の攻撃は理論としては、理解されていたと思われる。

ヴォーバン(1633-1703）は、17 世紀後半にルイ 14 世に仕えたフランス軍技術顧問として傑出した業績を残し、同時代のオランダ人クーホルンとともに、西欧の軍事を科学的・論理的に発展させた人物である。

要塞戦闘については、要塞の攻撃方法や攻囲・要塞施設について、土木工学技術の観点から研究し、塹壕掘削による攻撃の戦術を開発した。

ヴォーバンの攻囲戦法は、要塞の火砲の影響を受けない場所から発進して、敵の射撃の回避が可能な塹壕を掘り進むことで攻撃をする方法である。

その手順を大略述べれば、まず、要塞外壁に対して直交する方向に一定距離だけ塹壕を掘削して要塞に近づき、そこから今度は要塞外壁に平行な方向に塹壕を掘削する。この第 1 平行壕を攻撃用の兵員や物資の集結場所とする。同じ要領で、第 1 平行壕から必要な距離だけ要塞外壁に近づく塹壕を掘削し、再び要塞外壁に平行に第 2 平行壕を設ける。次いで、第 2 平行壕から要塞方向に塹壕を延伸し、要塞外壁の至近距離に第 3 平行壕を掘削する。この第 3 平行壕から要塞攻撃に必要な塹壕を要塞外壁に到達するまで掘削を進める。第 3 平行壕付近には高層の土塁が設けられ、ここからの援護射撃を受けながら第 3 平行壕に終結していた攻撃部隊が、要塞外壁を突破して要塞内部に侵入し、敵陣地内での戦闘に移行する。

この後、味方の砲撃により要塞外壁に突破口を開削し、攻撃軍本隊が侵入して陣地を占領する。乃木第三軍が採った正攻法のもとには、このヴォーバンの攻囲戦法があったと思われる。

対象資料の本文の中で、上記の☆〜☆間の記述の説明として、川瀬亨の手記の手書きの文章とともに側防施設の構造と攻撃を図解した堡塁の断面、および平面図が示されている。

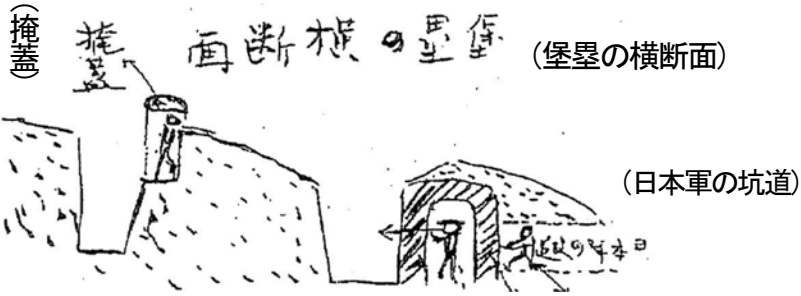


図 13　対象資料 p.18 にある川瀬亨の手書きの堡塁横断面

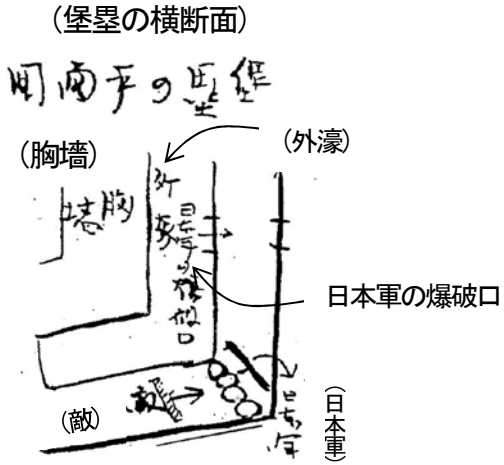


図 14　対象資料 p.19 にある川瀬亨の手書きの堡塁平面図

堡塁は横断面図左手の外濠内側の掩蓋および側防設備の両方から外濠に侵入した敵を挟みこんで迎撃する仕組みであるが、これに対し日本軍は横断面図右手の「日本軍の坑道」を掘り進み、側防設備の壁を破壊して内部の敵を攻撃した様子が横断面図で示されている。

図 19 旅順要塞の戦い

（出典：仏紙 『ル・モンド・イリュストレ』1905.1.14（横浜開港資料館蔵））

門形の支保工、天井の板などから爆破した敵要塞斜堤に通じる坑道の端部での戦闘の様子と思われる。日本軍の坑道が側防設備に到達し、壁を破って内部のロシア軍兵士と戦闘状態に入った様子を示している。

左下には坑内の照明（提灯）があり、坑道掘削に使用したと思われるつるはしを手にする兵士も見られる。

平面図では「外濠側防設備内の敵を駆逐してこの点で占領し土嚢を積み重ねて敵の来襲に備へている」の説明が付されている。次いで外濠側の側防設備を爆破して外濠に侵入して、一部を占領した胸墻爆破の準備にかかる様子が平面図で説明されている。以上の作業によって、本文にある胸墻爆破のための立脚地を得た。

1905 年 1 月 14 日付けのフランス紙の『ル・モンド・イリュストレ』には、坑道内におけるロシア兵との戦闘が描かれているが、これは対象資料による外濠側防設備における攻防の戦闘状況である。

坑道内での戦闘によって胸墻爆破のための立脚地を占領すると、次いで

爆破作業が行われた。外濠内側の胸牆（きょうしょう：胸壁(パラペット)の意味）を爆破する方法として、坑道に爆薬を仕掛けて破壊をする坑道式発破（薬室発破）と呼ばれる方法が採用された。この方法は今日では大量の岩石を一時に採取する場合に用いられ、岩山の裾や山の中腹に坑道を掘進し、その奥に装薬室を設け大量の爆薬を装填した後、坑道を抗口まで完全に埋め戻してから点火して山一つを一挙に爆破する。

11 月 26 日の第 3 回総攻撃の時には 600 キロの爆薬で爆破したが、胸牆の一部の破壊のみで堡塁の本体に何ら影響がなく失敗であった。この後、爆薬強度を 2,500 キロに増加して 12 月 18 日午後 4 時に大爆発を行い、これに続いて突撃隊が突入して堡塁を占領に至った[16]。

正攻法による攻撃は、「第 11 師団の幕僚の考案と第一線各部隊就中、工兵隊の攻囲間の実戦的経験で案出されたものでこれが見事に成功したことは実に愉快なことであった」とある。

川瀬亨大尉は対象資料において軍司令部と師団の意見の不一致、意思疎通の課題を指摘しているが、第一線の現場における立場から、組織論における基本的な課題を実感的に認識したものと思われる[19]。

対象資料のこの部分には、北砲台の破壊、東鶏冠山北堡塁占領後の防備を固める様子、戦死者を埋葬するロシア軍、明治 38 年 1 月 13 日に行われた入城式の写真 4 枚が挿入されている（不鮮明につき掲載省略）。

(9) あとがき　(対象資料 pp.24-25)

◇あとがき

この記述は昭和一九年一一月七日付で一先ず打ち切り、今後予の餘命のあるに従い続行することにせん。」と父は遺稿の末尾に記している

尚、父は大正一四年陸軍中将、大正一五年三月特命予備役となった。

○筆者一東方科学技術協力会副会長・新潟大学名誉教授・農学博士
　川瀬金次郎

＜写真・先帝陛下宇都宮に武を閲し給ふ・明治 42 年宇都宮大演習に那須野ケ原黒磯北方なる後野立場に御統監（御右側は梨本宮殿下次は奥元帥御説明申し上るは川瀬少佐なり＞

余命のある限り続行する、とあるように、川瀬亨は対象資料の手記の執筆後、翌昭和 20 年 4 月 27 日の死去までの間に、大正 5 年に軍用自動車および第一次大戦視察で観戦武官として渡欧した記録を残している。これをもとに川瀬金次郎は対象資料の続編として「川瀬亨中佐の第一次世界大戦視察記」をまとめている。なお、筆者の川瀬金次郎は平成 8 年に東方科学技術協力会会長に就任し、平成 19 年 9 月 19 日に 97 歳で死去された。

最終ページには川瀬亨少佐の写る明治 42 年に実施された宇都宮大演習の写真が 2 枚掲載されているが、上記はこのうちの 1 枚（他 1 枚は不鮮明につき省略）である。

4．あとがき

対象資料「川瀬亨大尉の旅順攻囲戦手記」は、松井道昭を中心とする「日本近現代史研究会[20]」において、研究資料として取り上げたものである。対象資料は川瀬亨の曾孫石川優美子が、川瀬金次郎の長女上村嶺子より提供を受けた。

対象資料はその歴史資料価値にも関わらず、一部の関係者のみに保管されるままでは、一般の歴史研究者の閲覧に供する可能性は小さい。このため、通常の歴史資料と同様に、検索、閲覧の書誌コントロールのカバーされる資料の一般化をはかり、将来へ継承される手立てとして、研究会の報告をもとに、とりまとめたのが本稿である。本稿によって、対象資料が一私文書の範囲を超えて、一般に供される歴史資料となり、将来に継承されることとなれば幸いである。

注釈および参考文献

1　日露戦役写真帖（第三軍　第3号　明治38.4）に掲載の28サンチ砲の試射の写真である。明治37年10月頃と推測される。

2　第11師団の東鶏冠山北堡塁の爆破成功の12日後の12月30日の松樹山堡塁の爆破の写真である。愛知大学国際中国学研究センター中国戦前絵葉書データベース蔵。

3　陸軍大学校への批判の文章は川瀬金次郎が編集の際に削除したもので内容を含めその理由については不明である。陸大批判の内容としては、日露戦争後、陸軍大学校では、第三軍旅順攻囲戦を批判する「機密日露戦史」（谷寿夫著、陸士15期、陸大24期）を教科書として採用していることなどが想定される。この部分について研究会において議論をしたが、より確度の高い考察を加えるには、更なる資料に基づく論考が必要である。川瀬金次郎著の対象資料を紹介することを目的とする本稿では、紙幅の制約もあり、内容、理由などに関する考察は含めな

かった。

4　古川薫著『斜陽に立つ―乃木希典と児玉源太郎』文春文庫、2011 年の p.282 によれば、乃木将軍が南山に登り漢詩金州城を詠んだのは旅順攻囲戦前の明治 37 年 6 月 7 日とある。

5　川瀬金次郎の経歴は、加村崇雄著、日本土壌肥料学会誌、平成 19 年 10 月に掲載された記事「川瀬金次郎博士を偲ぶ」に基づく。

6　川瀬亨の軍歴は「歴史が眠る多摩霊園」に基づく。
http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/K/kawase_to.html

7　この記述は、隅谷三喜男著、中公文庫『日本の歴史 22－大日本帝国の試練』昭和 59 年、p. 265 からの引用である。この記述に従えば、第一回総攻撃後に初めて司令部幕僚が永久築城の掩蔽要塞を認識したとある。これについては疑問の点もあるが、西洋式要塞に対する当時の日本軍の認識の一側面を示すものとして引用した。

8　「明治 37、8 年戦役 陸軍省軍務局砲兵科業務詳報 砲兵科第 3 篇 戦役間弾薬の準備及両砲兵工廠の拡張」に記述がある。

9　「第三軍命令 10 月 25 日、軍隊区分、各師団攻撃目標他（旅順攻囲軍参加日誌別綴 明治 37 年、国立公文書館アジア歴史資料センター）」に記述がある。

10　「第三軍命令 10 月 31 日、松樹山、二龍山、東鶏冠山北 3 砲台占領他（旅順攻囲軍参加日誌別綴 明治 37 年）」に記述がある。

11　明治卅七八年日露戦史、付図第六巻第 21 をもとに一部加工した。

12　「第三軍命令 11 月 23 日、軍は 26 日攻撃再興し望台一帯の高地を奪取せんとす（旅順攻囲軍参加日誌別綴 明治 37 年）」に記述がある。

13　「第三軍命令 11 月 27 日、軍は現攻撃中止、更に 203 高地を奪取せんとす（旅順攻囲軍参加日誌別綴 明治 37 年）」に記述がある。

14　「第三軍命令 12 月 4 日、第 7 師団 5 日 203 高地西南部嶺頂に向い突撃を決行他（旅順攻囲軍参加日誌別綴 明治 37 年）」に記述がある。

15　「連合艦隊告示第 216 号 12 月 23 日、旅順港内敵艦隊滅亡せり（旅順

攻囲軍参加日誌別綴 明治37年)」に記述がある。

16 「第三軍命令1月1日、軍は確実に東鶏冠山北 二龍山及松樹山の三砲台を占領せり（旅順攻囲軍参加日誌別綴 明治 37 年)」に記述がある。

17 『明治工業史　化学工業編』、工学会　大正 14 年発行の第三節　セメント、p.462 に、明治20年から30年代にかけて「・・生産年額百万樽を称するに至れり。斯くて漸次供給は需要に超過し・・・」とある。なお 1901 年のシベリア鉄道開通以前にあっては、東アジア市場に出始めた日本産セメントが膨大なコンクリートを必要とした旅順の港湾・要塞設備等の建設材料に流れた可能性がある。

18 爆薬については、ロシアからの鹵獲とあるように、ロシア軍が所有していたノーベル社製のダイナマイトが使用された。東鶏冠山北堡塁破壊によって、歩兵による要塞攻撃の爆薬の効果が注目され、直ちに東京砲兵工場岩鼻火薬製造所（群馬）の拡張工事が着手され、明治38年12月にダイナマイトの爆発試験実施を経て、明治39年以後珪藻土ダイナマイトの国産が行われた。

19 タスクフォース組織にあって、出先（現場）と本部の指揮、意思疎通は、とくに現場における刻々と変化する状況に応じ、情報量、質の両者間の格差によって、常に大きな課題となる。近年では、東日本大震災の福島原子力発電所の水素爆発後の海水注入の判断をめぐる発電所所長と東電本社、これを飛び越えた当時の菅首相の間のやりとりを想起させる。

20 日本近現代史研究会構成メンバー: 飯沼玲子、石川優美子、五十畑弘、木原悠、熊本靖浩、谷八重子、中村洋一、松井道昭、真野文子、眞間弥生（50音順）